

修士論文要旨

『体験話法におけるモダリテートについて』

黒 沢 宏 和

体験話法は、これまでさまざまな研究がなされてきたのにもかかわらず、数多くの未解決の問題を残し、今日では体験話法に関する研究そのものが減少する傾向にある。それに加え、語学的見地からのアプローチが比較的少なく、それらも主として形態論の見地から論じられたものがほとんどである。

しかしながら、法・人称・時称などにまたがる複雑な文法構造をもつ体験話法を形態論の見地からのみ考察するのは、必ずしも得策だとは思われない。

そこで本稿では、体験話法を意味論、とりわけ現在注目されつつあるモダリテート (Modalität) の側から考察することにした。

体験話法に関しては、「名称」「内的独白との比較」「3人称直説法過去形」の問題に照明を当て、それらの考察を通じて筆者なりの定義をすることとどめた。

モダリテートに関しては、一般にモダリテートを表すとされている話法の助動詞 (Modalverben)、話法詞 (Modalwörter)、心態詞 (Modalpartikeln)、話法の不定詞 (Modale Infinitive)、そしてその形態から言えば明らかに形態論に属するものの、それを構成する各々はモダリテートを表すとされている法 (Modi)、さらに以上を総括した話法の体系 (Modalsysteme) をそれぞれ概観した。その結果、次のような問題点が挙げられる。

1. 「モダリテート」という語自体曖昧で、厳密な定義がなされていない。
2. „Modaladverben“, „Modalwörter“, „Modalpartikeln“ 等の語の区別が曖昧である。

3. Modalverben, Modalwörter, Modalpartikeln 等のモダリテートを表す語彙的手段にのみ、研究が集中している。

以上のことを考え合わせれば、「モダリテート」という語の定義が曖昧なまま、モダリテートを表す Modalverben, Modalwörter, Modalpartikeln などの語彙的手段にのみ、研究者の目が向けられている、と言えよう。

以上の体験話法及びモダリテートの考察を踏まえ、体験話法におけるモダリテートを考究した結果、「願望」「推量」「疑惑」「必然性」「否定」など、さまざまなモダリテートが体験話法によっても表されることが判明した。さらに筆者は、体験話法におけるモダリテートを次のように特徴づけた。

1. 体験話法におけるモダリテートは、体験話法という限られたフィクションの中でのみ表される。
2. 体験話法は、Modalverben, Modalwörter, Modalpartikeln などの語彙的手段と同様に、さまざまなモダリテートを表しうるが、体験話法におけるモダリテートは、その性質上、モダリテートが作者自身のものであるのか、あるいは登場人物のものであるのか区別し難い。
3. これまでの主として語彙的手段に注目したモダリテート研究では、個々の語彙的手段を表すモダリテートは考察されてきたが、残念ながらそれらを総括したモダリテートはいまだ考究されていない。これに対し、体験話法の表すモダリテートは、一般にこれらの語彙的手段をすべて含みうるので、語彙的手段を超えて、文あるいは文章全体の表すモダリテートを考察できる。

1970年代以降の語用論、コミュニケーション論の発達に伴い、モダリテートの研究の中でもとりわけ Modalpartikeln などの語彙的手段に研究が集中している。すでに W. Schmidt が指摘したように、今後この傾向は益々強まるように思われる。

しかし、モダリテートを表しうるのは、Modalverben, Modalwörter, Modalpartikeln などの語彙的手段だけではない。そこで、これらの一般にモダリテートを表すとされている語彙的手段をすべて含みうる体験話法を、新しいモダリテート研究の一領域として考えるのも有意義なことではなからうか。